

「ケチらない」が宴会マナー

Toshi
'11.02.20
SUGITA

甲南大学教授 杉田俊明

先週は北京と天津に出張した。宴会続きの毎日だった。中国の方々と親交を深め、また、さまざまな話題について議論し、効率的に情報交換を行なうには、宴会が効果的だ。とりわけビジネスパーソンにとっては、人脈づくりやその維持、取引先との良好な関係構築において宴会は重要なツールである。

中国人はもともと客人を大切にもてなす習慣がある。たとえ貧しくても、客人には腹いっぱい食べさせてあげたい。見栄っ

張りもあるが、真心でもある。中国の「飯に行こう」は日本の「飲みに行こう」というようなもので、仲間が集まってわいわい楽しむ場でもある。

ところで、中国的な宴会マナーには深いものがある。知らずにいると元も子もなくなる。立場に応じた席順が一例だが、これ以外に留意すべき事柄を二つここに記しておく。

「ケチらない」と、「自分だけで飲まない」ことだ。中国の宴会風景は昔と変わらない

部分と、変わりつつある部分がある。まず、変わらないのは、食べ切れないほどの料理が並べられ、それも残されたままで引かれ、次の料理に取って代わる。宴会が終了しても、多くが残されたままである。もったいないことだが、これには盛会だ、お腹がいっぱいだというサインが織り込まれている。

逆に、きれいさっぱり食べられたら、足りなかった、ケチられたことになる。無駄にならないよう計算する日本人に招待さ

れ、後で何か自分で食わなければ腹が持たないと中国の友人に言われたのは2度や3度ではない。だから中国人を招くなら、最初から豪快に行くべきだ。

次に、変わりつつある部分だが、飲み方や種類である。いままでは、酒豪でも中国の宴会を恐れていたのは、アルコール度数が高いものを、意識を失うまで何回も「乾杯」といって一気飲みを促されていたからだ。

しかし、いまの中国では優雅にワインをたしなむようになりつつある。一気飲みを控えるようになりつつある中で、気遣いが細やかになってきたのである。杯を頻繁に挙げ、相手方に敬意を表しながら何かの挨拶をし、アイコンタクトしながら相手とともに軽く飲む。

主人が客人に、客人が主人に、そして、参加者同士がそれぞれ乾杯のあいさつを行いながら会話を楽しむのがいまの流れである。だれにも愛想もせず、自分だけ飲むなら、宴会の意味を成さないのである。

